

『生きがい』 ～ 『もしかすると この時のため』 ～

2024年2月5日、東京都東久留米市の自由学園初等部（教頭 稲村祐子先生の企画）での【特別講演&映画会】に赴いた。自由学園は、『羽仁もと子』（1873-1957）夫妻によって、1921年開設されている。『羽仁もと子』は、婦人之友社の創立者でもある。『羽仁もと子記念がん哲学外来』が開設される予感がする。

6年生と保護者が参加されドキュメンタリー映画『がんと生きる言葉の処方箋』（画像）が上映された。熱心に真摯に観覧されている生徒と保護者の姿には大いに感動した。筆者は、その後、講演した。本当に有意義な時であった。早速【今日は雪の中、ありがとうございました。本当に素晴らしい講演で、子どもたちも、それぞれ感じたことがあったと思います。】との心温まるメールを頂いた。

今回、映画の協力プロデューサーの高瀬政広氏も参加されていた。帰りは、大雪であった。早速、高瀬政広氏から【樋野先生 本日は雪の中でしたが、自由学園初等部6年生のがん教育、ありがとうございました。今後もこのような講座の開催が 広がりますこと期待しています。】との励ましのメールと『雪の自由学園での写真』（画像）を送って頂いた。ただただ感謝である。

【神谷美恵子(1914 - 1979)の父、前田多門(1884-1962)が国際労働機関の政府代表として任命され、スイス、ジュネーブに転居。 --- 1926 年秋、父の仕事の任務が終わり、日本に帰国。 —— 帰国後に選んだ学校は自由学園でした。】とのメールが 京都在住の『神谷美恵子』研究者の田中真美先生から届いた。

前田多門の仲人は新渡戸稲造(1862-1933)であった。前田多門は、内村鑑三(1861-1930)の主宰する『柏会』に属していた。神谷美恵子が3歳の時に、新渡戸稲造は膝に抱いてあやしている。神谷美恵子は、『一生の思い出であった』と語っている。神谷美恵子は43歳でがんになり、生きがいを求めて『ハンセン氏病施設の長島愛生園』で精神科医として勤めた。そして『生きがい』を出版した。まさに『もしかすると この時のため』（エステル記4章14節）であろう！

がんも病気も個性のひとつです

「ハルコ」「マリアのへそ」「61ha 絆」
野澤和之監督作品

ドキュメンタリー映画
がんと生きる

言葉の処方箋

全力を尽くして
心の中で
そっと心配する

明日この世を去るとしても
今日の光に水をあげなさい

がんにも罹っても
明るく生きる人々がいる。
そこには心を癒やす
言葉の処方箋が溢れていた。

主演 樋野興夫 京本嘉利 野日井いづ子 豊崎智恵美 中村航大

プロデューサー 田寺康史郎 制作プロデューサー 若水秀典 上田幸博 青柳本保 原川清徳 企画協力 岡田裕志 制作協力 京本嘉利 撮影 吉田洋
監山田真 編集 高橋良介 録音 深野千穂 編集 宇井野人 音楽 合田洋生+514プロダクション M.A.竹山公一郎 実行委員 湯浅啓夫 発行 映画
監督 野澤和之 企画協力 株式会社オーバル・アドバタイジング 制作プロデューサー 田寺康史郎 2018年日本 カラー 16:9 スtereo 90分
制作 K&A ©2018がん哲学外来映画製作委員会 委員会事務局 E-mail: gantetsu@eiga2018.jp TEL: 03-5216-8918 FAX: 03-5216-8914

副作用はゼロ！
人生を変える「言葉の処方箋」

がん哲学外来提唱者 樋野興夫 教授
順天堂大学名誉教授。専門は前理学・難病学。医学と哲学を結びつけることを考えていた経緯から2008年順天堂大学にがん哲学外来を開設。医療の期間を埋めるべく言葉の処方箋を処方し続けている。2018年日本対がん協会朝日が大賞、日本癌学会「長与賞」受賞。

解決は出来なくても、解消は出来る

〈あらすじ〉
がん哲学外来から発展してできたのが、がん哲学外来メディカル・カフェ。全国のカフェで講演を続ける樋野教授。樋野先生の考え方に共鳴してそれぞれにカフェを開設して元気に生きる4人の主人公たち。乳がんを経験して自分の生きる使命に気づいた女性。大病院でがん哲学外来を実践する外科医。乳がんを体験して地域の人々と悩みを分かち合うシングルマザー。脳腫瘍を体験した高校生は、病の子供たちのために役立ちたいとカフェを運営する。それぞれが、言葉の処方箋を投げかけあい、生きる力を作り出していく。がんに関わる人々が元気になるその瞬間、映画空間が明るく人々に語りかける。

病に苦しむすべての人々に贈る映画

プロデューサーからのメッセージ
至る所でがんの話題が絶えません。この作品を通して病に苦しむ、悩むすべての人々に生きる勇氣と希望を感じてもらえればこの上なく幸いです。 田寺康史郎

監督：野澤和之 プロフィール
文化人類学を学んだ経験から文化社会の隅にいる人々を描いた作品が多い。代表作に在日一世を描いた「ハルコ」。元ハンセン病夫婦の物語「61ha 絆」など。自らも大腸がんを体験。執念の作品となった。

お問い合わせ：がん哲学外来映画製作委員会事務局
E-mail: gantetsu@eiga2018.jp TEL: 03-5216-8918 FAX: 03-5216-8914
制作・配給：©2018 がん哲学外来映画製作委員会 HP: kotobanosyohusen.wixsite.com/website

特別協賛 共創未来グループ 協賛 SVENSON FBC 福井放送株式会社
東邦ホールディングス株式会社

「開校 50 周年記念音楽&映画鑑賞教室」【体育館】
13:20～ 第1部 ユーフォニウム演奏鑑賞
(会場 13:10) ユーフォニウム奏者 安東 京平 先生
13:40～15:25 第2部 映画鑑賞等
がん教育 映画「がんと生きる 言葉の処方箋」
順天堂大学名誉教授、がん哲学外来市民学会代表 樋野 興夫 先生
※保護者、地域の方も参加自由です。

